

大正期「日本主義」者の連携——三井甲之と岩野泡鳴——

横 川 翔

はじめに

これまで、大正期「日本主義」は、明治期や昭和戦前期のそれに比し、積極的な議論の対象となることは少なかったように思われる。「大正デモクラシー」研究の再検討が提起されて久しい今日、「対抗イデオロギー」・「反動」と捉えられてきた大正期における国家主義的な思想の世界も見直しが進みつつある。

本稿で取り上げる三井甲之は、昭和戦前期「日本主義」の代表的な結社のうちの一つである原理日本社の思想的指導者として知られている。^①大正期における三井は、自然主

義文学者の岩野泡鳴と「日本主義」という標語を掲げて連携する関係にあった。二人に関して、片山杜秀氏は、「甲之は、大正後期からの、泡鳴との直接の交際をも通じ、その発想法を吸収したと言えよう」^②と指摘している。しかしながら、実際には、二人は明治末年から緩やかに接近はじめ、大正五年（一九一六）に手を結んだのであり、どのような必然性から連携したのかについては解明の余地が残っているといえる。本稿は、主として三井の思想的特質をさぐる観点から、連携を実現させた彼等の思想と行動を検討し、大正期「日本主義」の形成過程を明らかにするものである。

連携の相手となる岩野の「日本主義」については、主と

して文学史の領域から論じられてきた。^③ただ、三井との関係に言及した先行研究は伝統主義論争を取り上げたものを含めても限られている。もともと、岩野が主宰した雑誌『新日本主義』（のち、『日本主義』に改題）^④の残存状況が芳しかなかったことも理由としては考えられよう。

大正期の「日本主義」に関しては、神道家の今泉定助を取り上げた昆野伸幸氏が論及している。^⑤神道との結節点から検討を行なった昆野氏は、大正期の今泉に人格主義の影響を認め、「日本主義」もまた時代の影響を免れなかったことを指摘した。とはいえ、今泉はあくまでも日本主義的な主張を展開していた神道家である。すなわち、積極的に「日本主義」を標榜し、自らの思想と行動を律していた思想家とは性質を異にすることに注意しなければならぬ。このため、厳密な意味での大正期「日本主義」を検討するに際しては、何よりも三井と岩野を取り上げる必要がある。ところで、本稿が立脚する連携という視角は、比較する二人以上の対象が実際に交流を重ね、思想と行動を共にしていたという点において、任意的に比較対象を選ぶ方法とは異なっている。^⑥連携の視角から目的意識や行動規範における共通項や乖離を検討することによって、より等身大の思想家像を描き出すことができるはずである。

以上を整理し、本稿の目的をまとめるならば、明治末年

から大正中頃における三井と岩野による連携の具体像をさぐり、二人の相違と大正期「日本主義」の形成過程を明らかにすることである。まず次節では、明治末年から大正初年のあいだに彼等が接近していった経緯から検討を進める。

第一節 民族主義の思想的共振

三井甲之が岩野泡鳴のことを意識しはじめたのは、明治四十年（一九〇七）の暮れであったと思われる。この頃の三井は、同年七月に東京帝国大学を卒業し、文壇に「門出」するべく、処女詩集『消なほ消ぬかに』の発行を準備していた。岩野はその野心に満ちた詩集を寄贈する相手の筆頭に挙げられていたのであった。^⑦同年十一月、同書は岡麓が経営する彩雲閣から発行された。ただ、この過程からは三井が岩野のどのような特質に関心を抱いたことで寄贈を考えたのかはわからない。その関心の一端がうかがえるのは、翌年二月に三井が創刊した雑誌『アカネ』^⑧においてである。同誌の創刊号で三井は次のように岩野に言及している。

人の心は古今東西を通じて決して全く変化相違するものではない。けれども何等か国民の特性及其詩人自身の特有の情調が顕はれて居らねば芸術としての生命は

ない。(中略)岩野氏の詩には此の日本の面影がよくあらはれて居る。詩人の本国及郷土に対する無意識的憧憬の情があらはれて居る。⁹⁾

三井にとって「芸術」は、「人の心」のような普遍性を志向すると同時に個性的で国民的な特質をあらわしたものでなければならなかった。このような考え方は、明治末年において、「個人」を「旧思想」や「旧道徳」より解放放とうとした自然主義文学の運動を背景の一つにしていると考えられる。解放放たれた「個人」には再定位が試みられた。例えば、雑誌『白樺』を明治四十三年(一九一〇)四月に創刊した中心メンバーの一人であった武者小路実篤は、自然主義に飽き足らない観点から、「自分達はある社会の子になる前に人類の子になつてしまつたのである」と述べ、「個人」と「人類」を結びつけるコスモポリタンの立場を明らかにしている。三井にあつては、「吾々は自己の態度をナチュラリストと云つてもよい」と自然主義を評価する姿勢を示しながらも単純な個人主義は拒否し、「国民的自覚」¹³⁾の必要を唱えることを選んだ。三井から見た岩野はその観点を満足させる存在であつた。

岩野はかねてから、「わが国体は個人が乃ち国家、国家は乃ち絶対個人で、その間に殆ど相對個人の存立を許さない。上一人、即ち、最強者でなければ、殆ど何物でもない

のである」という「個人主義的国家主義」を主張していた。この考え方を岩野は自ら「新自然主義の国体論」と称し、自然主義とは破壊的傾向を共有しながらも建設的な提示をすることで一線を画そうとしたのであつた。この「個人主義的国家主義」は、伴悦氏によると「(個人」と(国家)が単に両立するといった現象論的立場ではなく、あくまで(個人)の拡張体としての(国家)であり(主義)であつた」とされる。すなわち、「個人」と特殊性を結びつける傾向としては、三井も岩野も同じ地平に立っていたことがうかがえよう。明治四十二年(一九〇九)、岩野が三井について、「帝国大学派」のなかでも「僕等の意見を割合ひによく摂取してゐる」と評したのは、自然主義時代を経験したお互いの思想的な近親性に裏づけられていたのであつた。

大正改元をむかえるに先立ち、三井は「国民」よりも「民族」を称揚しはじめた。このような変化には、ドイツの民族心理学者ヴィルヘルム・ヴントの影響を見てとることができる。三井は明治四十二年の日記に「十二時までヴントシステムヒロソヒーを読む精神興奮二時に至つて漸く就眠」¹⁵⁾と書くほどにいれこんでいた。雑誌『人生と表現』(『アカネ』改題)に掲載された三井の「ヴントの歴史的開展に関する序説」は、ヴントの *System der Philosophie* の抄

訳である。その抄訳には、「世界史は個人の歴史ではなく民族の歴史である」¹⁹との一節も見えるため、三井には早い時期から民族主義を主張する準備は整っていたものと思われる。次に掲げる三井の文章は、こうしたヴントの発想を取り入れ、持論の補完を旨指したものとして理解することができる。

すでに歴史的開展となればそれは個人の事柄ではなくなつて民族の事柄になるのである。これは現在世界に存在する民族の差が事実を以て明証して居るのである（中略）それ故吾等は個人としての生を究尽するには民族としての歴史的開展を究尽せねばならぬので、こゝに於て世界的であり人類的存在であるその内容たるべきは飽くまで民族的生活を営む個人である。²⁰

明治四十五年（一九二二）七月における明治天皇の崩御をうけ、三井は「われらは明治の大御代に新しく世界にあらはれたのである。われらは今われらであり、世界の人類であるがために日本民族であることを自覚せねばならぬ」²¹と述べた。すなわち、普遍性を志向するためには「日本民族」である特質をまず「自覚」する必要があると説いたのであった。以降の三井は、大正元年をふりかえった文章で「文壇に於て民族的自覚を唱へたものはわれらであつた」と自負しているように、「個人」が「世界的」で「人類的」

であるためには「民族的」でなければならないことを強調する主張を確立した。

大正改元前後、「民族」は時代状況を説明する一つの視点であつた。例えば、大隈重信の主宰していた雑誌『新日本』が大正二年（一九一三）十月に「世界民族号」と題する特集号を発行したのは、辛亥革命やバルカン戦争、米国カリフォルニア州の日本移民排斥運動を背景としていた。このような背景から、同誌記者は特集号の趣旨について、「今日の最大問題は小にしては個人と個人、大にしては民族と民族の接衝に外ならずと存ぜられ候」²²と述べている。要するに三井が自らの民族主義を明確化したのは、時代状況と無関係ではなかつた。なお、同誌は誌上でアンケート企画も行なっている。そのうちの「二十世紀の優勝者たるべき最大民族は何れぞ？」という問いに対し、岩野は「僕は日本民族が、少くとも一たび、世界の最大民族である時が来ると信じます」という展望を回答した。

そのような「民族」をめぐる議論を加速させたのが大正三年（一九一四）七月における欧州大戦の勃発であつた。民族間の対立は三井に確信を与えたらしく、次に掲げるように民族主義が現実問題として扱われはじめたことを歓迎している。

欧州の戦乱によつて民族的生活が学問的研究の上から

のみではなく、実際の生活の上から重要なものであることが事実によつて示された。われらが民族的生活の意義を力説した時、欧州に於ける最近数十年の平和が醸した理知主義を模倣して居る文壇の人々は個人主義をふりかざしてわれらに反対した、しかし此の平和といふ仮定が除去された時われらの主張は事実と生命との威力を以て彼等を説服したことは愉快である⁽²⁵⁾。

そして、同年八月における日本の対独宣戦布告について、三井は「やうやくわれらの信が実現せらるべき時が来ました⁽²⁶⁾」と肯定的にむかえ、日本が「民族」の世界史のなかで活動していくことを評価したのであった。

一方の岩野も「民族」についての思索を深めつつあった。例えば、翌年一月に刊行した『寛博士の古神道大義』において、「苟くも生きようとする人間には、国家や民族の限定は偶然の縁ではなく、肉体の存在と同時に必然の条件だ⁽²⁷⁾」と断じ、これまでの「個人」と「国家」を一体視する見方に「民族」を加えている。かつて、岩野にはカニ缶詰の事業で一旗揚げようと樺太に渡った過去があった。樺太ではアイヌの人びとやロシア人などと交流を重ねたが、岩野の目に映じた彼等は「土人」・「外国人」に留まり、管見では「民族」意識を芽生えさせる衝撃はなかったようである。大正四年に「民族」の意義を主張しはじめるのは、や

はり時代状況の影響といえよう。一口に「民族」や「国家」を論じているように見えても、背景には三井と同じく「世界」・「人類」と「個人」の関係を如何に捉えるかという問題が孕んでおり、それは岩野が「コスモポリタン、乃ち世界主義者」を指して、「渠等は国家や民族が人類生存の必要条件であることを軽んじた⁽²⁸⁾」と述べていることからわかる。

明治末年から大正初年にかけて、三井と岩野は、「個人」と「世界」・「人類」を架橋するためには「民族」的な自覚がなくてはならないと考える共通の思想構造を形成していたのであった。そしてそれは、世界大戦の勃発と有機的につながっていた。

第二節 雑誌『新日本主義』の創刊

前節で検討した思想的な共振の過程において、三井甲之と岩野泡鳴のあいだには実際的な交流も生じはじめていた。岩野の大正二年（一九一三）における日記には、「「人生と表現」社へ立ち寄り、三井氏に会ふ（四五年前二三度訪問してくれたが、いつも留守であつたのを思ひ出して⁽²⁹⁾）」と書かれている。「人生と表現社」は雑誌『人生と表現』の発行所であり、その所在地は三井の自宅である。「四五年

前」というと三井が先述の処女詩集を岩野に献呈した頃であらうか。三井は何度か岩野のもとを訪ねるも面会がかなわなかったらしい。敢えて岩野がこのときになって三井を訪問したのは、その翌年の文壇を回顧した文章で「僕が注意したのは第一に三井甲之助氏の発表である」という評価を与えていることからうかがえるように、大正初年における両者の思想的展開と連動しているのではないかと思われる。

人生と表現社の人びとも岩野に注目していた。例えば、大須賀乙字、川出麻須美、広瀬哲士、松本彦次郎、木村卯之などである。川出は三井に宛てた書簡で「かれ〔岩野…筆者注、以下同〕は日本始つて以来の天才³³」とまで綴っている。大須賀も岩野とは酒食を共にするなかで親交を深めていた³²。しかしながら、松本のように、「個人と社会との関係についても個人主義さへ万能になれば国家が発展するといふ口調である。氏〔岩野〕はこの個人と国家との関係については何等の説明をしない」と「個人主義的国家主義」を批判する同人も存在した。もっとも、岩野は人生と表現社の催しによる松本のシカゴ留学送別会に参加して³⁴、³⁵、³⁶、³⁷、³⁸、³⁹、⁴⁰、⁴¹、⁴²、⁴³、⁴⁴、⁴⁵、⁴⁶、⁴⁷、⁴⁸、⁴⁹、⁵⁰、⁵¹、⁵²、⁵³、⁵⁴、⁵⁵、⁵⁶、⁵⁷、⁵⁸、⁵⁹、⁶⁰、⁶¹、⁶²、⁶³、⁶⁴、⁶⁵、⁶⁶、⁶⁷、⁶⁸、⁶⁹、⁷⁰、⁷¹、⁷²、⁷³、⁷⁴、⁷⁵、⁷⁶、⁷⁷、⁷⁸、⁷⁹、⁸⁰、⁸¹、⁸²、⁸³、⁸⁴、⁸⁵、⁸⁶、⁸⁷、⁸⁸、⁸⁹、⁹⁰、⁹¹、⁹²、⁹³、⁹⁴、⁹⁵、⁹⁶、⁹⁷、⁹⁸、⁹⁹、¹⁰⁰、¹⁰¹、¹⁰²、¹⁰³、¹⁰⁴、¹⁰⁵、¹⁰⁶、¹⁰⁷、¹⁰⁸、¹⁰⁹、¹¹⁰、¹¹¹、¹¹²、¹¹³、¹¹⁴、¹¹⁵、¹¹⁶、¹¹⁷、¹¹⁸、¹¹⁹、¹²⁰、¹²¹、¹²²、¹²³、¹²⁴、¹²⁵、¹²⁶、¹²⁷、¹²⁸、¹²⁹、¹³⁰、¹³¹、¹³²、¹³³、¹³⁴、¹³⁵、¹³⁶、¹³⁷、¹³⁸、¹³⁹、¹⁴⁰、¹⁴¹、¹⁴²、¹⁴³、¹⁴⁴、¹⁴⁵、¹⁴⁶、¹⁴⁷、¹⁴⁸、¹⁴⁹、¹⁵⁰、¹⁵¹、¹⁵²、¹⁵³、¹⁵⁴、¹⁵⁵、¹⁵⁶、¹⁵⁷、¹⁵⁸、¹⁵⁹、¹⁶⁰、¹⁶¹、¹⁶²、¹⁶³、¹⁶⁴、¹⁶⁵、¹⁶⁶、¹⁶⁷、¹⁶⁸、¹⁶⁹、¹⁷⁰、¹⁷¹、¹⁷²、¹⁷³、¹⁷⁴、¹⁷⁵、¹⁷⁶、¹⁷⁷、¹⁷⁸、¹⁷⁹、¹⁸⁰、¹⁸¹、¹⁸²、¹⁸³、¹⁸⁴、¹⁸⁵、¹⁸⁶、¹⁸⁷、¹⁸⁸、¹⁸⁹、¹⁹⁰、¹⁹¹、¹⁹²、¹⁹³、¹⁹⁴、¹⁹⁵、¹⁹⁶、¹⁹⁷、¹⁹⁸、¹⁹⁹、²⁰⁰、²⁰¹、²⁰²、²⁰³、²⁰⁴、²⁰⁵、²⁰⁶、²⁰⁷、²⁰⁸、²⁰⁹、²¹⁰、²¹¹、²¹²、²¹³、²¹⁴、²¹⁵、²¹⁶、²¹⁷、²¹⁸、²¹⁹、²²⁰、²²¹、²²²、²²³、²²⁴、²²⁵、²²⁶、²²⁷、²²⁸、²²⁹、²³⁰、²³¹、²³²、²³³、²³⁴、²³⁵、²³⁶、²³⁷、²³⁸、²³⁹、²⁴⁰、²⁴¹、²⁴²、²⁴³、²⁴⁴、²⁴⁵、²⁴⁶、²⁴⁷、²⁴⁸、²⁴⁹、²⁵⁰、²⁵¹、²⁵²、²⁵³、²⁵⁴、²⁵⁵、²⁵⁶、²⁵⁷、²⁵⁸、²⁵⁹、²⁶⁰、²⁶¹、²⁶²、²⁶³、²⁶⁴、²⁶⁵、²⁶⁶、²⁶⁷、²⁶⁸、²⁶⁹、²⁷⁰、²⁷¹、²⁷²、²⁷³、²⁷⁴、²⁷⁵、²⁷⁶、²⁷⁷、²⁷⁸、²⁷⁹、²⁸⁰、²⁸¹、²⁸²、²⁸³、²⁸⁴、²⁸⁵、²⁸⁶、²⁸⁷、²⁸⁸、²⁸⁹、²⁹⁰、²⁹¹、²⁹²、²⁹³、²⁹⁴、²⁹⁵、²⁹⁶、²⁹⁷、²⁹⁸、²⁹⁹、³⁰⁰、³⁰¹、³⁰²、³⁰³、³⁰⁴、³⁰⁵、³⁰⁶、³⁰⁷、³⁰⁸、³⁰⁹、³¹⁰、³¹¹、³¹²、³¹³、³¹⁴、³¹⁵、³¹⁶、³¹⁷、³¹⁸、³¹⁹、³²⁰、³²¹、³²²、³²³、³²⁴、³²⁵、³²⁶、³²⁷、³²⁸、³²⁹、³³⁰、³³¹、³³²、³³³、³³⁴、³³⁵、³³⁶、³³⁷、³³⁸、³³⁹、³⁴⁰、³⁴¹、³⁴²、³⁴³、³⁴⁴、³⁴⁵、³⁴⁶、³⁴⁷、³⁴⁸、³⁴⁹、³⁵⁰、³⁵¹、³⁵²、³⁵³、³⁵⁴、³⁵⁵、³⁵⁶、³⁵⁷、³⁵⁸、³⁵⁹、³⁶⁰、³⁶¹、³⁶²、³⁶³、³⁶⁴、³⁶⁵、³⁶⁶、³⁶⁷、³⁶⁸、³⁶⁹、³⁷⁰、³⁷¹、³⁷²、³⁷³、³⁷⁴、³⁷⁵、³⁷⁶、³⁷⁷、³⁷⁸、³⁷⁹、³⁸⁰、³⁸¹、³⁸²、³⁸³、³⁸⁴、³⁸⁵、³⁸⁶、³⁸⁷、³⁸⁸、³⁸⁹、³⁹⁰、³⁹¹、³⁹²、³⁹³、³⁹⁴、³⁹⁵、³⁹⁶、³⁹⁷、³⁹⁸、³⁹⁹、⁴⁰⁰、⁴⁰¹、⁴⁰²、⁴⁰³、⁴⁰⁴、⁴⁰⁵、⁴⁰⁶、⁴⁰⁷、⁴⁰⁸、⁴⁰⁹、⁴¹⁰、⁴¹¹、⁴¹²、⁴¹³、⁴¹⁴、⁴¹⁵、⁴¹⁶、⁴¹⁷、⁴¹⁸、⁴¹⁹、⁴²⁰、⁴²¹、⁴²²、⁴²³、⁴²⁴、⁴²⁵、⁴²⁶、⁴²⁷、⁴²⁸、⁴²⁹、⁴³⁰、⁴³¹、⁴³²、⁴³³、⁴³⁴、⁴³⁵、⁴³⁶、⁴³⁷、⁴³⁸、⁴³⁹、⁴⁴⁰、⁴⁴¹、⁴⁴²、⁴⁴³、⁴⁴⁴、⁴⁴⁵、⁴⁴⁶、⁴⁴⁷、⁴⁴⁸、⁴⁴⁹、⁴⁵⁰、⁴⁵¹、⁴⁵²、⁴⁵³、⁴⁵⁴、⁴⁵⁵、⁴⁵⁶、⁴⁵⁷、⁴⁵⁸、⁴⁵⁹、⁴⁶⁰、⁴⁶¹、⁴⁶²、⁴⁶³、⁴⁶⁴、⁴⁶⁵、⁴⁶⁶、⁴⁶⁷、⁴⁶⁸、⁴⁶⁹、⁴⁷⁰、⁴⁷¹、⁴⁷²、⁴⁷³、⁴⁷⁴、⁴⁷⁵、⁴⁷⁶、⁴⁷⁷、⁴⁷⁸、⁴⁷⁹、⁴⁸⁰、⁴⁸¹、⁴⁸²、⁴⁸³、⁴⁸⁴、⁴⁸⁵、⁴⁸⁶、⁴⁸⁷、⁴⁸⁸、⁴⁸⁹、⁴⁹⁰、⁴⁹¹、⁴⁹²、⁴⁹³、⁴⁹⁴、⁴⁹⁵、⁴⁹⁶、⁴⁹⁷、⁴⁹⁸、⁴⁹⁹、⁵⁰⁰、⁵⁰¹、⁵⁰²、⁵⁰³、⁵⁰⁴、⁵⁰⁵、⁵⁰⁶、⁵⁰⁷、⁵⁰⁸、⁵⁰⁹、⁵¹⁰、⁵¹¹、⁵¹²、⁵¹³、⁵¹⁴、⁵¹⁵、⁵¹⁶、⁵¹⁷、⁵¹⁸、⁵¹⁹、⁵²⁰、⁵²¹、⁵²²、⁵²³、⁵²⁴、⁵²⁵、⁵²⁶、⁵²⁷、⁵²⁸、⁵²⁹、⁵³⁰、⁵³¹、⁵³²、⁵³³、⁵³⁴、⁵³⁵、⁵³⁶、⁵³⁷、⁵³⁸、⁵³⁹、⁵⁴⁰、⁵⁴¹、⁵⁴²、⁵⁴³、⁵⁴⁴、⁵⁴⁵、⁵⁴⁶、⁵⁴⁷、⁵⁴⁸、⁵⁴⁹、⁵⁵⁰、⁵⁵¹、⁵⁵²、⁵⁵³、⁵⁵⁴、⁵⁵⁵、⁵⁵⁶、⁵⁵⁷、⁵⁵⁸、⁵⁵⁹、⁵⁶⁰、⁵⁶¹、⁵⁶²、⁵⁶³、⁵⁶⁴、⁵⁶⁵、⁵⁶⁶、⁵⁶⁷、⁵⁶⁸、⁵⁶⁹、⁵⁷⁰、⁵⁷¹、⁵⁷²、⁵⁷³、⁵⁷⁴、⁵⁷⁵、⁵⁷⁶、⁵⁷⁷、⁵⁷⁸、⁵⁷⁹、⁵⁸⁰、⁵⁸¹、⁵⁸²、⁵⁸³、⁵⁸⁴、⁵⁸⁵、⁵⁸⁶、⁵⁸⁷、⁵⁸⁸、⁵⁸⁹、⁵⁹⁰、⁵⁹¹、⁵⁹²、⁵⁹³、⁵⁹⁴、⁵⁹⁵、⁵⁹⁶、⁵⁹⁷、⁵⁹⁸、⁵⁹⁹、⁶⁰⁰、⁶⁰¹、⁶⁰²、⁶⁰³、⁶⁰⁴、⁶⁰⁵、⁶⁰⁶、⁶⁰⁷、⁶⁰⁸、⁶⁰⁹、⁶¹⁰、⁶¹¹、⁶¹²、⁶¹³、⁶¹⁴、⁶¹⁵、⁶¹⁶、⁶¹⁷、⁶¹⁸、⁶¹⁹、⁶²⁰、⁶²¹、⁶²²、⁶²³、⁶²⁴、⁶²⁵、⁶²⁶、⁶²⁷、⁶²⁸、⁶²⁹、⁶³⁰、⁶³¹、⁶³²、⁶³³、⁶³⁴、⁶³⁵、⁶³⁶、⁶³⁷、⁶³⁸、⁶³⁹、⁶⁴⁰、⁶⁴¹、⁶⁴²、⁶⁴³、⁶⁴⁴、⁶⁴⁵、⁶⁴⁶、⁶⁴⁷、⁶⁴⁸、⁶⁴⁹、⁶⁵⁰、⁶⁵¹、⁶⁵²、⁶⁵³、⁶⁵⁴、⁶⁵⁵、⁶⁵⁶、⁶⁵⁷、⁶⁵⁸、⁶⁵⁹、⁶⁶⁰、⁶⁶¹、⁶⁶²、⁶⁶³、⁶⁶⁴、⁶⁶⁵、⁶⁶⁶、⁶⁶⁷、⁶⁶⁸、⁶⁶⁹、⁶⁷⁰、⁶⁷¹、⁶⁷²、⁶⁷³、⁶⁷⁴、⁶⁷⁵、⁶⁷⁶、⁶⁷⁷、⁶⁷⁸、⁶⁷⁹、⁶⁸⁰、⁶⁸¹、⁶⁸²、⁶⁸³、⁶⁸⁴、⁶⁸⁵、⁶⁸⁶、⁶⁸⁷、⁶⁸⁸、⁶⁸⁹、⁶⁹⁰、⁶⁹¹、⁶⁹²、⁶⁹³、⁶⁹⁴、⁶⁹⁵、⁶⁹⁶、⁶⁹⁷、⁶⁹⁸、⁶⁹⁹、⁷⁰⁰、⁷⁰¹、⁷⁰²、⁷⁰³、⁷⁰⁴、⁷⁰⁵、⁷⁰⁶、⁷⁰⁷、⁷⁰⁸、⁷⁰⁹、⁷¹⁰、⁷¹¹、⁷¹²、⁷¹³、⁷¹⁴、⁷¹⁵、⁷¹⁶、⁷¹⁷、⁷¹⁸、⁷¹⁹、⁷²⁰、⁷²¹、⁷²²、⁷²³、⁷²⁴、⁷²⁵、⁷²⁶、⁷²⁷、⁷²⁸、⁷²⁹、⁷³⁰、⁷³¹、⁷³²、⁷³³、⁷³⁴、⁷³⁵、⁷³⁶、⁷³⁷、⁷³⁸、⁷³⁹、⁷⁴⁰、⁷⁴¹、⁷⁴²、⁷⁴³、⁷⁴⁴、⁷⁴⁵、⁷⁴⁶、⁷⁴⁷、⁷⁴⁸、⁷⁴⁹、⁷⁵⁰、⁷⁵¹、⁷⁵²、⁷⁵³、⁷⁵⁴、⁷⁵⁵、⁷⁵⁶、⁷⁵⁷、⁷⁵⁸、⁷⁵⁹、⁷⁶⁰、⁷⁶¹、⁷⁶²、⁷⁶³、⁷⁶⁴、⁷⁶⁵、⁷⁶⁶、⁷⁶⁷、⁷⁶⁸、⁷⁶⁹、⁷⁷⁰、⁷⁷¹、⁷⁷²、⁷⁷³、⁷⁷⁴、⁷⁷⁵、⁷⁷⁶、⁷⁷⁷、⁷⁷⁸、⁷⁷⁹、⁷⁸⁰、⁷⁸¹、⁷⁸²、⁷⁸³、⁷⁸⁴、⁷⁸⁵、⁷⁸⁶、⁷⁸⁷、⁷⁸⁸、⁷⁸⁹、⁷⁹⁰、⁷⁹¹、⁷⁹²、⁷⁹³、⁷⁹⁴、⁷⁹⁵、⁷⁹⁶、⁷⁹⁷、⁷⁹⁸、⁷⁹⁹、⁸⁰⁰、⁸⁰¹、⁸⁰²、⁸⁰³、⁸⁰⁴、⁸⁰⁵、⁸⁰⁶、⁸⁰⁷、⁸⁰⁸、⁸⁰⁹、⁸¹⁰、⁸¹¹、⁸¹²、⁸¹³、⁸¹⁴、⁸¹⁵、⁸¹⁶、⁸¹⁷、⁸¹⁸、⁸¹⁹、⁸²⁰、⁸²¹、⁸²²、⁸²³、⁸²⁴、⁸²⁵、⁸²⁶、⁸²⁷、⁸²⁸、⁸²⁹、⁸³⁰、⁸³¹、⁸³²、⁸³³、⁸³⁴、⁸³⁵、⁸³⁶、⁸³⁷、⁸³⁸、⁸³⁹、⁸⁴⁰、⁸⁴¹、⁸⁴²、⁸⁴³、⁸⁴⁴、⁸⁴⁵、⁸⁴⁶、⁸⁴⁷、⁸⁴⁸、⁸⁴⁹、⁸⁵⁰、⁸⁵¹、⁸⁵²、⁸⁵³、⁸⁵⁴、⁸⁵⁵、⁸⁵⁶、⁸⁵⁷、⁸⁵⁸、⁸⁵⁹、⁸⁶⁰、⁸⁶¹、⁸⁶²、⁸⁶³、⁸⁶⁴、⁸⁶⁵、⁸⁶⁶、⁸⁶⁷、⁸⁶⁸、⁸⁶⁹、⁸⁷⁰、⁸⁷¹、⁸⁷²、⁸⁷³、⁸⁷⁴、⁸⁷⁵、⁸⁷⁶、⁸⁷⁷、⁸⁷⁸、⁸⁷⁹、⁸⁸⁰、⁸⁸¹、⁸⁸²、⁸⁸³、⁸⁸⁴、⁸⁸⁵、⁸⁸⁶、⁸⁸⁷、⁸⁸⁸、⁸⁸⁹、⁸⁹⁰、⁸⁹¹、⁸⁹²、⁸⁹³、⁸⁹⁴、⁸⁹⁵、⁸⁹⁶、⁸⁹⁷、⁸⁹⁸、⁸⁹⁹、⁹⁰⁰、⁹⁰¹、⁹⁰²、⁹⁰³、⁹⁰⁴、⁹⁰⁵、⁹⁰⁶、⁹⁰⁷、⁹⁰⁸、⁹⁰⁹、⁹¹⁰、⁹¹¹、⁹¹²、⁹¹³、⁹¹⁴、⁹¹⁵、⁹¹⁶、⁹¹⁷、⁹¹⁸、⁹¹⁹、⁹²⁰、⁹²¹、⁹²²、⁹²³、⁹²⁴、⁹²⁵、⁹²⁶、⁹²⁷、⁹²⁸、⁹²⁹、⁹³⁰、⁹³¹、⁹³²、⁹³³、⁹³⁴、⁹³⁵、⁹³⁶、⁹³⁷、⁹³⁸、⁹³⁹、⁹⁴⁰、⁹⁴¹、⁹⁴²、⁹⁴³、⁹⁴⁴、⁹⁴⁵、⁹⁴⁶、⁹⁴⁷、⁹⁴⁸、⁹⁴⁹、⁹⁵⁰、⁹⁵¹、⁹⁵²、⁹⁵³、⁹⁵⁴、⁹⁵⁵、⁹⁵⁶、⁹⁵⁷、⁹⁵⁸、⁹⁵⁹、⁹⁶⁰、⁹⁶¹、⁹⁶²、⁹⁶³、⁹⁶⁴、⁹⁶⁵、⁹⁶⁶、⁹⁶⁷、⁹⁶⁸、⁹⁶⁹、⁹⁷⁰、⁹⁷¹、⁹⁷²、⁹⁷³、⁹⁷⁴、⁹⁷⁵、⁹⁷⁶、⁹⁷⁷、⁹⁷⁸、⁹⁷⁹、⁹⁸⁰、⁹⁸¹、⁹⁸²、⁹⁸³、⁹⁸⁴、⁹⁸⁵、⁹⁸⁶、⁹⁸⁷、⁹⁸⁸、⁹⁸⁹、⁹⁹⁰、⁹⁹¹、⁹⁹²、⁹⁹³、⁹⁹⁴、⁹⁹⁵、⁹⁹⁶、⁹⁹⁷、⁹⁹⁸、⁹⁹⁹、¹⁰⁰⁰、¹⁰⁰¹、¹⁰⁰²、¹⁰⁰³、¹⁰⁰⁴、¹⁰⁰⁵、¹⁰⁰⁶、¹⁰⁰⁷、¹⁰⁰⁸、¹⁰⁰⁹、¹⁰¹⁰、¹⁰¹¹、¹⁰¹²、¹⁰¹³、¹⁰¹⁴、¹⁰¹⁵、¹⁰¹⁶、¹⁰¹⁷、¹⁰¹⁸、¹⁰¹⁹、¹⁰²⁰、¹⁰²¹、¹⁰²²、¹⁰²³、¹⁰²⁴、¹⁰²⁵、¹⁰²⁶、¹⁰²⁷、¹⁰²⁸、¹⁰²⁹、¹⁰³⁰、¹⁰³¹、¹⁰³²、¹⁰³³、¹⁰³⁴、¹⁰³⁵、¹⁰³⁶、¹⁰³⁷、¹⁰³⁸、¹⁰³⁹、¹⁰⁴⁰、¹⁰⁴¹、¹⁰⁴²、¹⁰⁴³、¹⁰⁴⁴、¹⁰⁴⁵、¹⁰⁴⁶、¹⁰⁴⁷、¹⁰⁴⁸、¹⁰⁴⁹、¹⁰⁵⁰、¹⁰⁵¹、¹⁰⁵²、¹⁰⁵³、¹⁰⁵⁴、¹⁰⁵⁵、¹⁰⁵⁶、¹⁰⁵⁷、¹⁰⁵⁸、¹⁰⁵⁹、¹⁰⁶⁰、¹⁰⁶¹、¹⁰⁶²、¹⁰⁶³、¹⁰⁶⁴、¹⁰⁶⁵、¹⁰⁶⁶、¹⁰⁶⁷、¹⁰⁶⁸、¹⁰⁶⁹、¹⁰⁷⁰、¹⁰⁷¹、¹⁰⁷²、¹⁰⁷³、¹⁰⁷⁴、¹⁰⁷⁵、¹⁰⁷⁶、¹⁰⁷⁷、¹⁰⁷⁸、¹⁰⁷⁹、¹⁰⁸⁰、¹⁰⁸¹、¹⁰⁸²、¹⁰⁸³、¹⁰⁸⁴、¹⁰⁸⁵、¹⁰⁸⁶、¹⁰⁸⁷、¹⁰⁸⁸、¹⁰⁸⁹、¹⁰⁹⁰、¹⁰⁹¹、¹⁰⁹²、¹⁰⁹³、¹⁰⁹⁴、¹⁰⁹⁵、¹⁰⁹⁶、¹⁰⁹⁷、¹⁰⁹⁸、¹⁰⁹⁹、¹¹⁰⁰、¹¹⁰¹、¹¹⁰²、¹¹⁰³、¹¹⁰⁴、¹¹⁰⁵、¹¹⁰⁶、¹¹⁰⁷、¹¹⁰⁸、¹¹⁰⁹、¹¹¹⁰、¹¹¹¹、¹¹¹²、¹¹¹³、¹¹¹⁴、¹¹¹⁵、¹¹¹⁶、¹¹¹⁷、¹¹¹⁸、¹¹¹⁹、¹¹²⁰、¹¹²¹、¹¹²²、¹¹²³、¹¹²⁴、¹¹²⁵、¹¹²⁶、¹¹²⁷、¹¹²⁸、¹¹²⁹、¹¹³⁰、¹¹³¹、¹¹³²、¹¹³³、¹¹³⁴、¹¹³⁵、¹¹³⁶、¹¹³⁷、¹¹³⁸、¹¹³⁹、¹¹⁴⁰、¹¹⁴¹、¹¹⁴²、¹¹⁴³、¹¹⁴⁴、¹¹⁴⁵、¹¹⁴⁶、¹¹⁴⁷、¹¹⁴⁸、¹¹⁴⁹、¹¹⁵⁰、¹¹⁵¹、¹¹⁵²、¹¹⁵³、¹¹⁵⁴、¹¹⁵⁵、¹¹⁵⁶、¹¹⁵⁷、¹¹⁵⁸、¹¹⁵⁹、¹¹⁶⁰、¹¹⁶¹、¹¹⁶²、¹¹⁶³、¹¹⁶⁴、¹¹⁶⁵、¹¹⁶⁶、¹¹⁶⁷、¹¹⁶⁸、¹¹⁶⁹、¹¹⁷⁰、¹¹⁷¹、¹¹⁷²、¹¹⁷³、¹¹⁷⁴、¹¹⁷⁵、¹¹⁷⁶、¹¹⁷⁷、¹¹⁷⁸、¹¹⁷⁹、¹¹⁸⁰、¹¹⁸¹、¹¹⁸²、¹¹⁸³、¹¹⁸⁴、¹¹⁸⁵、¹¹⁸⁶、¹¹⁸⁷、¹¹⁸⁸、¹¹⁸⁹、¹¹⁹⁰、¹¹⁹¹、¹¹⁹²、¹¹⁹³、¹¹⁹⁴、¹¹⁹⁵、¹¹⁹⁶、¹¹⁹⁷、¹¹⁹⁸、¹¹⁹⁹、¹²⁰⁰、¹²⁰¹、¹²⁰²、¹²⁰³、¹²⁰⁴、¹²⁰⁵、¹²⁰⁶、¹²⁰⁷、¹²⁰⁸、¹²⁰⁹、¹²¹⁰、¹²¹¹、¹²¹²、¹²¹³、¹²¹⁴、¹²¹⁵、¹²¹⁶、¹²¹⁷、¹²¹⁸、¹²

宣言

- 一、新日本主義はわが民族、わが国家の内部として発展する偉大なる個人主義、乃ち、個人主義的国家主義である。
- 二、かかる個人主義はわが皇室とわが国体とを十分に擁護するが、形式ばかりの忠君愛国を標榜するものとは違ひ、虚偽を含む叫びを断じて採用しない。
- 三、新日本主義は世界に対しては内部的帝国主義である。
- 四、この主義は国家民族を離れて空想的に人類若くは個人を取り扱はうとする種類の個人主義、世界主義、社会主義、並に個人の偉大性を認めぬ単純な国家主義を最も排斥する。
- 五、新日本主義は国語を重んずること勿論であるが、殊に国語を以つて独立の思想を表現するものを重んずる。
- 六、この主義は実力のあるところ、乃ち、道なるを以つて、国際間に於いてもまた自己の内心に於いても、そら頼みの正義や人道を云はず、またこれを人にも手段として強いず。
- 七、新日本主義は僕等の実生活の純全を期するが故に、現在一般の形式に安んずる生活を革新し、かかる旧形式を以つて僕等を埋没して来た儒教、仏教、耶穌教等の外来思想からわが国人を救ふのである。これ最高最深い内部的宗教その物である。

【「宣言」(『新日本主義』第1巻第1号、大正5年1月)】

「新日本主義の運動」を構想していた岩野に転機が訪れたのは、大正四年(一九一五)十月のことであった。山本喜市郎という旧知の実業家が樺太から上京してきたのである。岩野は日記に「氏(山本)の宅に於いて訪問したが、菊判三十二ページばかりの雑誌を勝手に出すだけの費用を負担すると云ふから、「新日本主義」と云ふ名で僕の意見を発表する舞台にしようかと思つた」と書き綴り、新運動

の具体的な計画を練りはじめた。その五日後、岩野は「三井(甲)氏へ手紙、加藤(朝島)、武林(無想庵)二氏へハガキ(三名とも今度の雑誌の件で)」を送っている。加藤と武林は岩野の年来の友人であった。興味深いのは、岩野が三井から「運動賛成」の返事を受けたのち、広瀬、木村、大須賀へ書簡を送付しているという順序である。恐らくは、人生と表現社の同人たちの助力をあおぐにあたり、岩野は三井にまでもって断りを入れたのであろう。

大正五年(一九一六)一月、『新日本主義』が創刊され、連携は確立期に入る。岩野は創刊に際し、七カ条の「宣言」(「宣言」参照)を発表した。また、「雑誌としては如何にも小さいが、運動としては大きいことを僕等は信じてゐる。つまり、この雑誌は日本思想の独立、日本文明の独立日本人としての生活の独立等を確立させるための大運動の小機関である」と抱負を語っている。執筆者は、岩野、三井、木村、広瀬、武林、加藤の順番であった。実に人生と表現社の同人が半数を占めており、この状態は岩野の急死によって同誌が大正九年(一九二〇)で断絶するまで続くことになる。三井は創刊号に「原理としての『日本』」を寄せ、次に掲げるように初めて自覚的に「日本主義」の字句を用いた。

単に『日本』と言葉で現しただけでは何の内容もない

のであるけれども、現実から離れて空想に模索して居るものには此の言ふまでもなき事実、日本と日本国民とその歴史との事実で随順せしむるの機縁となるのである。神といひ阿弥陀仏といひ靈魂等といふよりも、それらを現実的に表現するために世界現世に於ける日本といひ、これを根柢として進まむとするそれを日本主義と解し、時代の進運に適合する生命の新鮮を相続する意味に於て新日本主義と名づくべきであると思ふのである。⁽⁴²⁾

三井にとって、日本は「事実」であり、また「現実」である。「日本主義」が根柢を得るのは、そのような日本の「事実」・「現実」から背離した「空想」に固執する人びとの存在によつてであつた。三井が排斥する「空想」は、「世界」や「人類」に立脚するコスモポリタンの発想であり、次第に民本主義や社会主義などにも批判が加えられることになる。一步進んで「神」・「阿弥陀仏」・「靈魂」などに消極的な姿勢を示すのは、それらを生み出したのが「日本」にほかならないからであり、「事実」・「現実」としての「世界現世に於ける日本」に従うことが前提の条件と考えられたためであつた。三井が著した「原理としての『日本』」は、そのような思想と行動の規範を表現した「日本主義」の告白にほかならない。岩野との合同が三井に名

実を伴う「日本主義」者としての自覚を生じさせたのである。岩野は第二号において、「新日本主義の意義」と題する論説を発表し、このような三井の「日本主義」の主張と軌を一にする姿勢を示している。

僕等はかの出来そこないの哲学者等が云ふ宇宙の市民でもない。僕等はまたかの中途半端の立ち場にとどまる社会主義者等の主張するやうな個人的労働者でもない。僕等は日本民族、日本国家を離れては、魚が水から出たやうな無能無力の動物になつてしまふのである。此点から僕等はかの世界主義を以つて人類を取り扱ふ空想に極力反対する。⁽⁴³⁾

大正期における「日本主義」者の連携はこのようなかたちで結実した。しかしながら、三井と岩野の共同戦線に向けられた評者の視線は厳しかった。例えば、『中外日報』の記者は、「然るに茲に一疑問あり、三井甲之氏一派の主張と岩野泡鳴氏の主張との関係はなり。三井甲之氏一派は従来の主張によれば一方に於て個人主義とは絶対に相容れざるものなり⁽⁴⁴⁾」と指摘し、「個人主義の権化とも云ふべき岩野泡鳴氏」との連携に疑問を呈した。中外日報社では、三井や岩野を取材した経験のある伊藤證信が主筆を務めていたため、踏み込んで疑義を呈することができたのであろう。岩野は同紙記者に対し、批判を「当を得なからう」と

斥け、「掟の一点一画まで無相違にしよう」としたり、またさう望むのは、活きた主義や活動を殺して用ゐよと云ふ注文に過ぎぬ⁴⁵」と切り返した。

三井も「岩野氏が真に『日本』を目あてにするならば、名義上の主張の上に少しぐらゐる矛盾があつても気にせぬのです⁴⁶」と『中外日報』記者に応答し、岩野の反応に同調するかまゑをみせた。同じ環境で思想と行動を陶冶してきたわけではない人物同士の連携にあつては、このような相違は生ずべくして生じるものである。三井と岩野は、相違を当然のこととして受け入れ、「個人」と「日本」との関係についての理解を共有していたため、批判を些細なものとして斥けることができた。

連携における不一致は、三井も岩野も自覚していた。ほかの『新日本主義』執筆陣からは、加藤のように、「岩野泡鳴氏対三井甲之氏の問題は僕一個の考としては両方とも異なつたままで道を進めるがよからうと思ふ⁴⁷」と述べる向きもあつた。次節では、彼等がこの不一致をどのように認識し、乗り越えていったのかについて検討しよう。

第三節 「宣言」改訂問題

『中外日報』記者が論説を発表する以前から、『新日本主

義』の執筆陣も不一致を意識していた。三井は「意見の相違ある心配やらのことごとくに関して」、岩野に書き送ったことがあるという。岩野はこの問題について、「たとへば、個人と団体との調和し方に於いて、三井氏には個人の方を余り固定させて考へる為めにこれをさし置いても先づ団体的な力と生活から議論を發展させようとし⁴⁸」ていることを相違点の一つとして挙げ、「一般の個人主義とは違つた優強個人の説」を理解してもらえらるゝとお互いの立場が接近するであらうと考えた。さらに岩野は次のように問いを重ねる。

個人を固定的傾向に考へれば空疎な世界主義に走るから、僕も三井氏と共に排斥する。が、三井氏の団体主義が若しこんな世界主義を避ける手段としてこの、個人主義排斥ならば、そのつき詰めたところは上杉博士等の憲法論の如く偉力ある個人を忘れたものになりはせぬだらうか？⁴⁹

つまり、三井が「個人」を民族や国家と接続しない「固定」した存在として捉えるあまりに「団体的」な面からの議論に終始しているのではないかと岩野は考えたのである。そういった議論は、岩野が旧式と断じる上杉慎吉による「個人」を忘れた「国家主義」と同じものになりかねない。この処方箋として、「優強個人」をそのまま「国

家」に拡張する「個人主義的国家主義」への理解が呼びかけられたのであった。三井はこのような岩野の提言に対し、「氏は優強個人の意義を力説しますけれども、氏と私とは此の場合には見地を異にする」と明言した。とはいえ、次に掲げるように、三井は「団体的」な観点から試みる議論も「個人」を軽んじることはないと答えている。

民族主義といひ又社会的国家的団体的生活を重んずるといふことは、それが思想上の主張である以上は、必ず具体的に個人的経験に上つた民族主義であるべきだ、それ故に民族主義は活きた思想としては、個人に素質と修養とに差がある如くに、千差万別のものである。そしてその思想を実現する上には、(中略)強大なるものと弱小なるものとの間に無数の階次があるべきだ。それ故に民族主義、又その實際的制限の下に於て必然的に日本主義たるべき、その主張は偉力ある個人を看過するものではない。⁵²⁾

「個人」に優劣がある如く、各民族の民族主義にも優劣を認める観点から、三井は「日本主義」が「偉力ある個人」の存在を軽視することはないと述べる。ただ、三井は前掲の一文に続けて、「個人」を「団体的生活の中に於て始めて実現の根柢を得べき」存在として位置づけており、この点で岩野の唱える「優強個人」に立脚する「個人主義

的国家主義」と異なっていた。表面的には岩野と同じ「日本主義」を掲げたとはいえ、そのなかの「個人」の捉え方が連携に齟齬をきたす要因となっていたのであった。いずれにしても、大正期における「日本主義」は、明治末年に文壇を制覇した自然主義の個人主義と世界大戦が呼び起こした民族主義との調和をめぐる議論から出発したのである。ここに三井と岩野が一つの思想的な場に会合する必然があった。

実は三井が「個人」を軽視していると見做されたのはこれが初めてではない。大正三年(一九一四)の時点において、前述の伊藤證信から、「三井氏等一派は民族的生活と云ふものを最も尊重し、個人は之を第二に置く⁵³⁾と評されたことがある。三井は伊藤に対して、「われらが民族的生活といふ事実に従順する、それを『個人は第二に置く』などと推論されてはこまる。第一も第二もない全事実である⁵⁴⁾」と抗弁し、「個人」と「民族的生活」とを分離しているわけではないことを力説した。すなわち、「個人」の捉え方に關しては、三井と岩野の距離は簡単に接近するものではなかったのである。それでは、連携によって露呈した不一致は、どのように解決が図られたのであろうか。

大正五年(一九一六)十月、『新日本主義』は題号を『日本主義』に改めた。岩野によると「日本主義に新の字を加

宣言

一、僕等は日本を中心として世界の文明、進歩、並に統一の爲めに戦ふ。

二、僕等は日本の思想の、日本の国語の、並に日本人としての生活の、独立を期する。

三、わが民族性並にわが国家的制限を離れて僕等は実際の個人や人類として存立出来ぬことを確信主張する。

四、外国人の事は外国人をして理由づけしめよ、僕等には実力のあるところ、乃ち、道なるを以つて、国際間に於いてもそら頼みの正義や人道や博愛を云はず、またこれを他にも手段として強いぬ。

五、忠君愛国は僕等に自然必須の内的条件ではあるが、これを形式的にばかりふりがさず虚偽の叫びは断じて採用しない。

六、目的と手段、理想と實際とを空しく区別して申しわけの余裕を生ぜしめ、現実の生活の充実と純全とを忘れるやうなものは僕等の徒ではない。

七、肉霊合致の生々主義は僕等の哲学であり、純全征服の生活は僕等の宗教である、そしてこれは、無論、理論としてはかりでなく、実行としてだ。

八、僕等の排斥する思想若しくは主義は下の如し、曰く独断的個人主義、独断的国家主義、空想的世界主義、並に無政府的社会主義。

【新「宣言」(『日本主義』第1巻第10号、大正5年10月)】

へるのがわざとらしく聴えるだけ損だと思へた⁽⁵⁵⁾からであるという。改題に併せ、雑誌の方針である「宣言」も改訂された(新「宣言」参照)。岩野は「宣言も成るべくみんなに共通するやうに書き換へた」と述べており、改訂が連携の齟齬と無関係ではないのは明らかである。新「宣言」

では、「個人主義的国家主義」などといった岩野の属人的な用語が極力削除され、抽象性の高い内容に置き換えられている。このことから、岩野が如何に「日本主義」を三井たちも巻き込んだ運動として展開させようと苦心したかがわかる。

三井は新「宣言」について、『『包容的に』武器をまづ国語に、ちからのいづみを日本の史的生活に、出発点を国家に、そして目ざすところは世界と人類の史的生活に求めたならば、現在のほくらの主張をあらまし示し得よう⁽⁵⁶⁾』と感想を寄せており、「個人」に関する考えを差し置いたうえで岩野との共通点を見出そうとする努力がうかがえる。また、ここで『『包容的に』』と三井が強調したのは、岩野が新「宣言」に託した「みんなに共通するやうに」という意図を汲んでいるのであろう。

「宣言」を手直した岩野が「但し僕一個としての意見は勿論これが爲めに變動したのではない」と述べているように、改められたのは雑誌の指針であり、個々人の思想ではなかった。「宣言」改訂によって見出されたのは、連携継続のための共通軸である。大正五年の前後において、「日本主義」を公然と掲げた人物は少なかった。それゆえに、当時の「日本主義」者における最大公約数を目指そうとした新「宣言」からは、大正期「日本主義」における一

傾向を見て取ることができる。

彼等が新「宣言」で再確認したのは、「民族性」や「国家的制限」を離れて「個人」は存在できないということであった。「個人」にとって「正義や人道や博愛」は「それら頼み」であって、現実的な威力は「民族性」や「国家的制限」に求められたのである。とはいえ、「日本主義」者たちは、国家主義を象徴する標語ともいえる「忠君愛国」を単純に掲げることは避けた。天皇、あるいは国体の神聖さについて、積極的に論及しないことは大正期「日本主義」者における特徴の一つである。何となれば、そのような特殊な存在は、「国家」や「民族性」という制限のもとで生ずる文化的特質の所産であることから、「日本主義」者がまず論ずるべきは天皇や国体の神聖さを下支える「個人」と「国家」の関係でなければならなかった。国家を無視する「独断的個人主義」、個人を無視する「独断的国家主義」、国家や民族の制限を無視する「空想的世界主義」や「無政府的社会主義」が槍玉に挙げられるのは、そのような関係を毀損する思想であると考えられたためであった。「宣言」改訂以降、『日本主義』執筆陣における齟齬は殆んど表面化しなくなった。理由としては、伝統主義論争などで「日本主義」者として人道主義に反対することが主目的となり、江口渙や土田杏村などのような反対者も登場し、

細かな問題に拘泥する余裕が薄れたという側面がある。あるいは、折りから伸長しはじめていた民本主義や社会主義に対峙するなか、「日本主義」自体の訴求力も比例して増していたことも見逃せない。しかしながら、雑誌としての『日本主義』は経営的に満足できない状況に陥り、毎月の刊行はできなくなっていくたうえ、新たな活動の展開も見出せなかった。国本社や猶存社などといった競合者も増加し、「日本主義」が珍しい思想ではなくなったことは一つの要因であろう。

そのようななか、『日本主義』は大正九年（一九二〇）五月における岩野の急死に伴い、廃刊の辞もなく、刊行を停止してしまった。後年、三井はこのことについて、「此の小さい雑誌から有力なまた永久的のシゴトが発足すべきであつたのに、彼は彼と交つてをつたわれらの同志俳人大須賀乙字の早世（大須賀も大正九年一月に急死）を悼みつゝ、間もなく彼も世を去つたのである」と回顧している。

岩野の死によって、大正期「日本主義」者の連携は完全に解消された。この連携を当事者はどのように評価していたのであろうか。岩野は「日本主義」を第一期から第三期に分類したことがある。第一期には、明治二十年代の三宅雪嶺や志賀重昂の雑誌『日本人』、ならびに陸羯南の新聞『日本』が挙げられている。第二期は、明治三十年代の木

村鷹太郎、竹内楠三、井上哲次郎、高山樗牛による大日本協会である。そして、次に掲げるように、第三期に自分たちを位置づけていた。

僕の日本主義は、個人を自由な内容とするがこれを分量的には見ないところの国家主義であり、偏物でも偏霊でもないところの現世主義の哲学であり、また肉霊合致の宗教である。然し余ほどこまかい条件に立ち至りさへしなければ、三井甲之氏等の『人生と表現』社連中の主張もこれには同じ傾向である。また、茅原華山氏は僕等の思想にどれだけ理解を持つてるか分らないが、その『日本評論』に於ける政治論には、新日本主義と云ふことを標榜してゐる。以上は第三期に属するもの等で、渠等の運動はこれから段々發展するのである。^②

細かい部分では一致をみなかったながらも、同じ「日本主義」者として三井と連携を果たし得たことをあらわす一文といえよう。ただ、同時代的には連携しなかった茅原のような「日本主義」を掲げる思想家は徐々にあらわれてきていたとはいえ、「これから段々發展する」という希望的な観測から明らかなように、第三期における「日本主義」は思想運動として必ずしも充実していなかったことは、岩野も認めるところであった。

おわりに

本稿では、大正期に「日本主義」を標榜した三井甲之と岩野泡鳴について、連携という視角から取り上げ、一つの思想的な場集った行動の背景と思想の内在的必然性を検討し、それを通して大正期「日本主義」の形成過程を明らかにしてきた。

明治末年の自然主義時代を出発点とする彼等は、「個人」のあり方をめぐる議論において、無媒介に「世界」や「人類」と関係させる世界主義に反対していた。彼等は、「個人」は「国民」・「国家」・「民族」のもとに置かれることによって、はじめて「世界」・「人類」のなかで存在できると捉え、積極的に特殊と普遍のつながりを見出そうと試みた。そのようななかで勃発した世界大戦は、民族主義に追い風となる一方、思想の独自性が問われる契機ともなった。大正五年に創刊された『新日本主義』は、自然主義が培った個人主義と世界大戦が喚起した民族主義の調和を図るプラットフォームとして機能した。

もっとも、三井と岩野が連携したことであらわになったのは相違点である。「優強個人」が「国家」に拡張する「個人主義的国家主義」を唱える岩野に対し、三井は「個

人」を「団体的生活の中に於て始めて実現の根柢を得べき」存在として位置づけた。内容的に一致していない二人の「日本主義」は、「宣言」改訂によって共通軸を見出す努力がなされた。「個人」の捉え方についての理解を差し置き、「個人」が「世界」・「人類」とつながるためには「民族」・「国家」といった制限によらなければならないことが再確認されたのである。

こうした試みは、明治末年から展開してきた三井の思想と行動における一つの到達点であった。大正期「日本主義」が当該期の「デモクラシイ」とどのようにかわりあい、昭和戦前期「日本主義」へと展開していくのかについての検討は次なる課題である。

注

- (1) 三井に関する主な研究は次に掲げるものがある。米田利昭「抒情的ナショナリズムの成立(一)」、『文学』第二八巻第一号、昭和三十五年(一九六〇)十一月。同右「抒情的ナショナリズムの自壊と復活(二)」(同右、第二九巻第二号、昭和三十六年(一九六二)二月)。同右「抒情的ナショナリズムの自壊と復活(完)」(同右、第二九巻第一号、昭和三十六年(一九六二)三月)。昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』(第七三巻、平成九

年(一九九七)、昭和女子大学近代文化研究所)。石井公成「親鸞を讃仰した超国家主義者たち(一)」、『駒澤短期大学仏教論集』第八号、平成十四年(二〇〇二)十月。竹内洋・佐藤卓己編『日本主義的教養の時代』(平成十八年(二〇〇六)、柏書房)。塩出環『天皇「原理主義」思想の研究』(平成十九年(二〇〇七)、神戸大学大学院国際文化学研究科須崎研究室)。木下宏一『国文学とナショナリズム』(平成三十年(二〇一八)、三元社)。塚田穂高『霊術・身体から宗教・国家へ』(栗田英彦・塚田穂高・吉永進一編『近代日本の民間精神療法』令和元年(二〇一九)、国書刊行会)。

(2) 片山杜秀「写生・随順・拝誦」(前掲『日本主義的教養の時代』所収)一一〇頁。

(3) 例えば、次に掲げる研究である。吉田精一『自然主義の研究』(下巻、昭和三十五年(一九六〇)、東京堂)。大久保典夫『岩野泡鳴』(昭和三十八年(一九六三)、南北社)。伴悦『岩野泡鳴論』(昭和五十二年(一九七七)、双文社出版)。森かをる『岩野泡鳴と寛克彦』(『近代文学研究』第一四号、平成九年(一九九七)二月)。大久保典夫『岩野泡鳴の研究』(平成十四年(二〇〇二)、笠間書院)。伴悦『岩野泡鳴文学の生成』(平成十八年(二〇〇六)、おうふう)。また、次の研究のように、「大正生命主義」の観点からも岩野への論及がある。鈴木貞美編『大正生命主義と現

代』（平成七年（一九九五）、河出書房新社）。同編『わび・さび・幽玄』（平成十八年（二〇〇六）、水声社）。

（4）最近、太田直樹「岩野泡鳴主幹雑誌『日本主義』第一卷調査報告」（『比較文学・文化論集』第三三号、平成二十八年（二〇一六）三月）でこれまで知られていなかった同誌の所在が確認され、残存状況は改善に向かっている。

（5）昆野伸幸「日本主義の系譜」（『岩波講座 日本思想』第一卷、平成二十五年（二〇一三）、岩波書店）。同右「日本主義と皇国史観」（『日本思想史講座 4——近代』平成二十五年（二〇一三）、ぺりかん社）では、「日本主義」の歴史的な展開過程がまとめられている。

（6）この視角については、拙稿「原理日本社の革新官僚批判」（中野目徹編『官僚制の思想史』令和二年（二〇二〇）、吉川弘文館）も御参照いただきたい。

（7）「甲之より父梧六宛書簡」（山梨県立博物館所蔵、古19-27、36、年月不明六日付）。内容から明治四十年暮れのものとは推定。同書簡によると三井は芳賀矢一から岩野を紹介されたようであるが、実際に面晤を得たかは定かではない。

（8）『アカネ』に関しては、拙稿「雑誌『アカネ』の再検討」（『史境』第七五号、平成三十年（二〇一八）三月）を御参照いただきたい。

（9）鹽山「野口米次郎氏の岩野泡鳴論」（『アカネ』第一卷

第一号、明治四十一年（一九〇八）二月）六四頁。「鹽山」は三井が用いた筆名の一つ。

（10）自然主義運動に関しては、主として次に掲げる研究を参考にした。吉田精一「自然主義の研究」（上巻・下巻、昭和三十三年（一九五七）・三十五年（一九六〇）、東京堂）。木村洋「文学熱の時代」（平成二十七年（二〇一五）、名古屋大学出版会）。

（11）武者小路実篤「六号雑感 人類からくる滋養分」（『白樺』第二卷第九号、明治四十四年（一九一）九月）一六二頁。

（12）（三井）甲之「評論」（『アカネ』第一卷第一号、明治四十一年（一九〇八）十二月）五六頁。前掲拙稿「雑誌『アカネ』の再検討」も御参照いただきたい。

（13）明治末年の三井は「国民的自覚」の一語を好んで用いた。「個人」と「人類」を結びつける『白樺』派のコスモポリタニズムに対し、三井は「国民的自覚」の欠如を批判したことから、双方のあいだで批難の応酬が起こっている。

（14）岩野泡鳴「国家人生論（加藤博士を論ず）」（『読売新聞』、明治四十年（一九〇七）十二月八日付朝刊）第七面。表題中の「加藤博士」とは加藤弘之を指す。

（15）前掲伴「岩野泡鳴論」一二二～一二三頁。

（16）岩野泡鳴「帝文記者に返す」（『読売新聞』、明治四十二年（一九〇九）四月二十五日付朝刊）第七面。

- (17) 例えば、前掲塩出『天皇「原理主義」思想の研究』、木下『国文学とナショナリズム』などを挙げることができる。
- (18) 「再生録日記」(山梨県立文学館所蔵、資料コード230093641) 明治四十一年十月十八日条。
- (19) 三井甲之「ヴントの歴史的開展に関する序説」(『人生と表現』第四卷第二号、明治四十五年(一九二〇六月)四五頁。
- (20) 同右「白樺同人、俳人の一派、佐々木信綱氏に与ふ」(同右、第四卷第五号、大正元年(一九一〇九月)七二頁。
- (21) 記者謹記「先帝をしめび奉る」(同右、頁数なし。内容から三井による執筆と推定。
- (22) 三井甲之「今年の文壇思想界」(『日本及日本人』第五九五号、大正元年(一九二〇十二月一日)七八頁。
- (23) 「今日の民族問題」(『新日本』第三卷第一号、大正二年(一九一三)十月)八九頁。なお、文壇における「民族」をめぐる議論に関しては、次に掲げる研究を参考にした。村田裕和『近代思想社と大正期ナショナリズムの時代』(平成二十三年(二〇一一)、双文社出版)。中山弘明『第一次大戦の「影」』(平成二十四年(二〇一二)、新曜社)。
- (24) 前掲「今日の民族問題」一三五頁。
- (25) 三井甲之「雪を詠ぜし歌」(『日本及日本人』第六三六号、大正三年(一九一四)八月十五日)九〇頁。
- (26) 「読者諸君」(『人生と表現』第六卷第九号、大正三年(一九一四)九月)二二頁。内容から三井による執筆と推定。
- (27) 「寛博士の古神道大義」(『岩野泡鳴全集』第九卷、平成七年(一九九五)、臨川書店)四一七頁。
- (28) 同右。
- (29) 「目黒日記」(『岩野泡鳴全集』第一四卷、大正二年二月二日―五日付)七二頁。
- (30) 岩野泡鳴「大正三年文芸界の事業、作品、人」(『早稲田文学』第一〇九号、大正三年(一九一四)十二月)四五頁。
- (31) 「川出麻須美書簡」(山梨県立文学館所蔵、資料コード230095762)。ただ、川出は『新日本主義』に参加していない。夜久正雄「「人生と表現」創刊前後」(『亜細亜大学教養部紀要』第六号、昭和四十六年(一九七二)十一月)でも同様の指摘がある。
- (32) このことについては、紅野敏郎「【泡鳴ノート】「常盤木」と「中外新論」をめぐるつて」(『岩野泡鳴全集』第二二卷、四七〇頁)を御参照いただきたい。
- (33) 松本彦次郎「岩野泡鳴氏に与ふ」(『人生と表現』第六卷第一号、大正三年(一九一四)十一月)二三頁。
- (34) 「巢鴨日記第二」(『岩野泡鳴全集』第一四卷、大正四年七月十一日付)一五七頁。
- (35) 岩野泡鳴「再び僕の「古神道大義」に就いて安成氏へ」(『読売新聞』、大正四年(一九一五)八月七日付朝刊)第六面。

(36) (岩野) 泡鳴「固定は真理にあらず」(『新日本主義』第一卷第三号、大正五年(一九一六)三月) 二八頁。

(37) 桑木文学博士談「枯渴の虞ある思想の源泉」(『東京朝日新聞』、大正三年(一九一四)八月十七日付朝刊) 第六面。

(38) 岩野泡鳴「桑木博士に与ふ」(『読売新聞』、大正三年(一九一四)十一月八日付朝刊) 第四面。

(39) 「巢鴨日記第二」(『岩野泡鳴全集』第一四卷、大正四年十月廿九日付) 一七一頁。

(40) 同右(同右、大正四年十一月三日付) 一七一頁。

(41) 「編輯を終りて」(『新日本主義』第一卷第一号、大正五年(一九一六)一月) 三七頁。内容から岩野による執筆と推定。

(42) 三井甲之「原理としての『日本』」(同右) 一五頁。

(43) 泡鳴「新日本主義の意義」(同右、第一卷第二号、大正五年(一九一六)二月) 一二頁。

(44) 棟「所謂新日本主義」(『中外日報』大正五年(一九一六)三月十一日付) 第一面。

(45) 泡鳴「僕等を未完成品とは？」(『新日本主義』第一卷第四号、大正五年(一九一六)四月) 二九頁。

(46) 三井甲之「『研究仲間』と内的平等」(同右、第一卷第五号、大正五年(一九一六)五月) 二四頁。

(47) (加藤) 朝鳥「編輯者より」(同右、第一卷第四号、大正五年(一九一六)四月) 三〇頁。

(48) 「編輯者より」(同右、第一卷第三号、大正五年(一九一六)三月) 二八頁。内容から岩野による執筆と推定。

(49) 同右。

(50) 同右、三二頁。

(51) 前掲三井「『研究仲間』と内的平等」二五頁。

(52) 三井甲之「超人主義と肯定否定」(同右、第一卷第四号、大正五年(一九一六)四月) 一九頁。

(53) 伊藤證信「『人生と表現』社同人の主張を評す」(『反響』第一号第二号、大正三年(一九一四)六月) 二九頁。

(54) 三井甲之「伊藤證信氏に」(『人生と表現』第六卷第七号、大正三年(一九一四)七月) 二八頁。

(55) 泡鳴「改題の辞」(『日本主義』第一卷第一〇号、大正五年(一九一六)十月) 一頁。

(56) 同右。

(57) 三井甲之「感想二則」(同右) 二頁。

(58) 注(55)に同じ。

(59) 三井甲之「岩野泡鳴の日本主義」(『新日本』第一卷第四号、昭和十三年(一九三八)四月) 四三頁。同誌は佐藤春夫などによる新日本文化の会から発行されたもの。

(60) 注(55)に同じ。茅原に関しては、水谷悟「雑誌『第三帝国』の思想運動」(平成二十七年(二〇一五)、ぺりかん社)を御参照いただきたい。

(筑波大学大学院)